

第182回 友の会 高雄から清滝へ

～錦雲溪にかじかの声を聞く～

日 時 2020年7月12日（日）
場 所 清滝川沿いを高雄から清滝へ
天 候 くもり一時小雨
参加者 一般 10名 スタッフ 18名 合計 28名

高雄と言えば紅葉の名所として名高い所である。秋には観光客であふれる所だ。多くのイロハモミジの青葉が我々の目を癒してくれる。

今日は、雨が心配だったのか、参加者は非常に少なかった。下見の時に、密を避けるため4つの班に分けて、時間差で出発することにしたが、その必要もなくなった。

下見の打ち合わせで、当会の看板でもある「店開き」も普段は1時間程度時間をかけるが、コロナのこともあり、短時間で終えることとした。

危険箇所チェックを踏まえ、スタートしてすぐの階段が非常に滑りやすいので、注意するよう促すこと、イラクサが生えているので、スタッフは参加者が触らないよう気を付けること、コース後半は山と川の間が狭く山側を歩くこと、木の橋の一部が腐っているので、避けて通ることなどをスタッフ間で情報を共有した。



いよいよ観察会開始となり、注意しながら階段を下り、足元の野草のオニルリソウやアオイスミレ、ハグロソウ、イラクサなどの特徴を説明しながら、清滝川に掛かる赤い橋を渡り、少し歩いて、再び橋を渡った。

梅雨らしい天気が続き、ここ半月以上雨の日ばかりで、水量はかなりのものだ。手入れのいきとどいた北山杉の樹林を見ていると、その美しさは格別の

ものがある。この辺りを歩く楽しみの一つだ。

見上げればモミジの柔らかな緑、視線を左側の斜面に移せば、コウヤコケシノブやホソバコケシノブなどのシダ類の濃淡が美しい緑、足元にはスギゴケなどの苔のモスグリーンとそれぞれの違った緑が視覚から体の中へ染み込んでとても癒される。



今は、車社会となり、昔から人気のハイキングコースであっても訪れる人も減少傾向だ。このような時代の流れのお陰もあって、外来種の侵入が抑えられているように感じる。

この時期は、観光客も少なく静寂の中、自然を独り占めできる。コース全般に山と川に挟まれた溪谷のため、日照時間は少なくコケ類やシダ類が育つには絶好の環境だ。特に目を引くのは、小さなシダ類



の種類の豊富さである。切り立った崖の岩には、岩肌が全く見えないほどシダが覆いつくしている。岩から染み出した水滴が葉を伝って、葉先に集まり、葉先から離れる瞬間、水滴はレンズのように輝き、七色に見える。何と美しい情景だろう。

参加者の皆さんも口々に「きれい」を連発していた。「ほらこれ見て、ここよ、水滴が光ってる」。まさに自然が織りなす造形美だ。

我々の目を楽しませてくれている多種多様なシダだが、シダどうしの勢力拡大をめぐる壮絶な戦いが絶え間なく繰り上げられるのだらうと思うと、益々愛おしくなってくる。

参加者の方は、カジカガエルが住んでいる環境だと知っていて、「鳴き声を楽しみにしている」と話していた。すぐ後ろの崖にカジカガエルを発見した。昼休憩をとっているとカジカガエルの声が聞こえ、野鳥のさえずりのようだ。ご飯を食べる手を止めて暫し聞いていた。



ウバユリ開花の様子

花は大きく開かない

花びらの内側の奥に赤褐色の斑点が見える

上のほうに見える細長い白いものは雄しべ

花糸の長さがすこしずつ違うので段々に見える

食べ終わったのを見計らってお待ちかねの「店開き」を始めた。コロナ対策のため短縮メニューで行い、キノコのクイズとウバユリの名前の由来、ウバユリのおしべは長さが違うなどを皆さんに説明した。



帰り道では欄干などが無い石橋があり、毎日のように雨が降った影響で橋に小さな流木が絡まったりしていたが、みんな十分に注意して、ゆっくり橋を渡った。

車の往来もなく、人にもほとんど出会わず、川の流れて下っていく、清涼感あふれるコースだった。

文責（弓削俊彬）



店開き シダ類もたくさん



きのこクイズをした



ウズグモの仲間



殻の高さが高く、体を長く伸ばしていたのはニッポンマイマイだろうか？



ハグロソウ



アクシバ



オオバノトンボソウ



ミゾホオズキ



ネムノキの花 (いい匂い)



オカタツナミソウ



オニルリソウ



ヒカゲノカズラの胞子葉